

足利風

a s h i k a g a - f u

2025
秋号
Vol.95



画：伊村恵利佳
書：風喜人

足利市民活動センター

開館時間：平日 10:00～19:00

休館日：土・日・祝日・第3月曜日

〒326-0052

栃木県足利市相生町1-1

マルニ額縁生涯学習センター3F

TEL 0284 (44) 7311

FAX 0284 (44) 7312

Mail info@shimin-act.jp

HP <http://www.shimin-act.jp>

HP QR コード



☆ ご案内 ☆

- * 特集！
『民藝』～美しいものが、美しい～
- * 言葉のあやとり
「POINT OF NORETURN」
- * 私のボランティアことはじめ
「足利旧市街地に息づく時の層（上）」
- * マチのちゃぶ台
「民芸と河井寛次郎」
- * INFORMATION

* 特集！ * 「『民藝』～美しいものが美しい～」

「民藝」とは民衆的工藝をあらわす言葉です。この言葉が生まれて今年で100年になります。1925年（大正14年）、思想家・柳 宗悦（やなぎ・むねよし）や京都の陶芸家・河井寛次郎、益子の陶芸家・濱田庄司らが、名も無き職人の手から生み出された日常の生活道具の美に着目して、「民藝」と名づけたのが始まりです。柳は後に、「民藝」は“民衆的”工藝であるとともに、“民主的”工藝でもあると述べています。白樺派の宗教哲学者でもある柳にとって「民藝」とは、美しいものを眺めるだけでなく、個々の心の中に、内なる平和を実現しようとする試みでした。また、奉仕の美でもありました。

モノは、見られるだけでなく、用いられることによって「民藝」になっていくのです。柳らは、1936年民藝運動の拠点として、東京・駒場に「日本民藝館」を創設します。濱田はこう語ります～この焼き物は、自分の考えから出たのではなく、“手が学んでいたさばきに委（まか）した、だからこそそこに“美”が宿ったのだ～と・・・。

工藝は手仕事です。手仕事は、いつも世にただ一つのもを生みます。それは固有の尊厳を有する存在でもあるのです。柳は、民藝に宿る美を、“無心の美”“自然の美”“健康の美”と語った。これらは、人間の根っこから生み出された思想であり、生活そのものに深く根差しているからこそ、飽きられず廃れず今現在まで続いているのです。

“民藝の心”とは普遍を求める心であり、人々の幸福や心地良さを自分の心で感じ取ること。そして、個々の暮らしを温かく豊かにするものでもあるのです。～M生～

* 言葉のあやとり *

POINT OF NO RETURN（もう戻れない！）

～あるロック・グループの歌詞～人が生きている間に、もはや戻ることのできない地点というものがあるはずだ。それは、危険であるかもしれないが、踏み出さざるを得ない地点である。

* マチのちゃぶ台 *

「民芸と河井寛次郎」

加納道子

柳宗悦を代表とする民芸運動のメンバーの一人に河井寛次郎がいる。彼の作品、陶器とやきものには伝統的な美しさの中に現代的でモダンなものを感じる。ずっと前からそのお皿が好きで、昔陶芸を習ったのもそんなお皿が欲しかったから。（浅はかにもそう思ったのだ！）

京都の町なかに河井寛次郎記念館がある。彼の生家である。自ら設計した家で奇をてらったところのない素朴で、それでいて洗練されている家だ。

私は河井寛次郎が好きだ。そしてこの家が好きだ。この家におじゃますると（そう、こんな表現をしたくなるのだ）家の中にただよっているその静謐な空気にはやされ、そこに置かれている数々の作品の中で私は何とも言いがたい幸せな気持ちになる。

この作品たちと記念館に出会えたことは私の人生において大切な財産となった。

私のボランティアことはじめ

「足利旧市街地に息づく時の層」(上)

—鏝阿寺と人々のいとなみ—

NPO 法人足利歴史まちづくりの会 理事長 沼尻了俊

足利旧市街地、そしてその中心に位置する鏝阿寺は、単に歴史的建築物や古い街並みの集まりではない。この地は、人々が生き、営みを重ねてきた軌跡をそのまま刻み込んだ「風土」として存在している。それは物理的な建物や道の集合を超え、街と人が互いに影響し合いながら共に作り上げた記憶の層であり、過去から現在、そして未来へと続く生きた記憶の場である。

この街が形成される以前、この場所は自然が広がり、条里制のなかで米作りがなされる田畑であった。やがて足利義兼がこの地に寺の前身を建立すると、地域に人々が集い始め、鏝阿寺を中心とする町が形成されていく。中世には、寺を取り囲むようにして足利氏の武家屋敷や番屋街が築かれ、歴史的な威容が街並みに刻まれた。寺が地域の精神的支柱としての役割を担う一方で、町は次第に人々の営みの場として発展を続けた。

明治・大正期、足利は織物産業の隆盛によって新たな時代の息吹を迎え、この旧市街地には映画館や花街、賑わう商店街が次々と出現した。足利の街はかつての静寂から一変し、活気と華やかさに満ちた都市の一面を見せ始めた。古くからの建物と新しい商業施設が混在し、街はまさに「新旧の共存」を象徴する場所となった。しかし、この繁栄も永遠ではなかった。繊維業の衰退と共に街の賑わいも徐々に静まり、時代と共に古い建物が取り壊され、少子高齢化という現実がこの街を覆い始めた。そして今、都市の再生を目指した区画整理という現代の波が押し寄せ、足利旧市街地は新しい形を模索している。

この長い時間の中で、鏝阿寺とその周辺の街並みはただ「変わってきた」のではない。むしろ、人々の記憶や日々の営みを受け入れながら、街そのものが「共に在る」存在として成長を続けてきた。現象学的な視点に立てば、この地にある建物や道は、見る者に過去の情景を呼び覚まし、そこに刻まれた人々の思いを自然と感じさせる「現象」として現れる。石畳の路地や木造の家々が放つ陰影、古びた商店街の看板、寺の門を風が抜ける音。これらは、ただ目に映る風景にとどまらず、かつてこの地を生きた人々の生活や感情の「痕跡」として、今もそこに立ち続けている。

こうした「記憶の層」を持つ街は、都市計画においてもまた特別な存在である。この地に根付く風景や風土は、設計図や計画書だけで再現できるものではなく、人々の手によって織りなされた「生きた風景」として街に宿り続けている。区画整理によって建物が変わり、新しい道路が敷かれるとしてもここで積み重ねられてきた記憶や思いは消え去ることなく、景観そのものに染み込んでいる。都市がどのように変容しようとも、そこに息づく人々の生活や感情が街の「心」として残り続ける限り、足利旧市街地はその風土と共に在り続ける。



* INFORMATION *

☆「まちの縁側」～読書サロンへのご招待～

だれにでも心に残る一冊の本があります。童話・小説・詩集・・・等々。
その一冊の本を導きの糸として、案内人を囲んで、参加者のみなさんと一緒に、
ワイワイガヤガヤ・・・と。新しい人との出会いや物語を紡いでみませんか。

★令和7年10月17日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「歌集『一握の砂』」(石川啄木)

* 案内人 : 日下部 悲天さん

★令和7年11月21日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「運命を拓く」(中村天風)

* 案内人 : 木村 寛 さん

★令和7年12月19日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「子どもの権利条約を学童保育に活かす」(安部芳絵)

* 案内人 : 三田 和子 さん

■参加費：無料

■会 場/問い合わせ：足利市民活動センター ☎44-7311

☆「企画展」(交流コーナー) (土・日・祝日・第3月曜日は休館日)

* 10月14日(火)～10月23日(木) 好彩会色鉛筆画展

* 10月27日(月)～11月 6日(木) 足利絵手紙の会展

* 11月10日(月)～11月20日(木) 川島直人水彩画展

* 11月25日(火)～12月 4日(木) NPO 法人足利歴史まちづくりの会展

* 12月 8日(月)～12月18日(木) 足利こどもの笑顔展

※展示時間・・・10:00～19:00 ただし最終日は15:00まで

☆「相談室」

* 相談室 = 10月 8日(水) 14:00～16:00 「美味しいコーヒーの淹れ方」

11月12日(水) 14:00～16:00 「家庭菜園をつくる」

12月10日(水) 14:00～16:00 「カンタン整理術教えます」

* 茶 論「ぽ・ぽ・ら出前講座」

10月22日(水) 14:00～16:00 「NPOの運営」

11月26日(水) 14:00～16:00 「地域のつながり」

編集後記

ボランティア・NPOにとって大切なのは“自立”ということです。協働も自立あつての協働と言えます。料理研究家の土井善晴さんはこう言います～料理するということは自立なんです。料理をして、おいしいまずいというよりも、料理という行為を、とにかくするということは自立。依存しないということ。そして生産者となつがるということもまさに自立だと思います。～人のからだは、食べたもので作られている。その食べ物を他者に依存せず自分の足で立つこと＝自立です。“利他”の研究者としてもトップランナーの土井善晴さんの言葉は重い。(カサブランカ)